

レビュー

在日外国人教育研究レビュー

中国帰国生教育を中心に

鍛治 致

本稿では、中国出身ニューカマーの代
表格である中国帰国者について年少者の
教育に焦点を絞ってレビューする。

一

本稿を執筆するにあたってはまず
CINA(サイニー。学協会誌・大学研究
紀要・国立国会図書館の雑誌記事索引デ
ータベースなど、学術論文情報を検索の
対象とする論文データベース・サービ
ス)で「在日中国人」「中国帰国」「中国
残留孤児」「中国残留婦人」をキーワー
ドに検索を行い、また、タイトルを手が
かりに年少者の教育に関係がありそうな

論文をピックアップした。こうして集め
られた論文は約七〇件だったが、タイト
ルに「中国人」と表記されていたものは
約二割のみ。残り八割は全て中国帰国者
について書かれていることが明らかだっ
た。また、これらの論文が発表された時
期は二〇〇〇年以降が約七割。掲載媒体
としてはその約四割が大学の紀要に掲載
された論文であり、学会誌に掲載された
論文は約一割。しかも「メジャー」な学
会に「研究論文」として掲載されたもの
はゼロに近い。したがって、中国帰国者
の年少者の教育に関する研究はまだ歴史
も浅く現在までにこれといって目立った
成果をあげていない——そう結論づけ
よう。

ところで、中国帰国者の新規入国は二
〇〇〇年以降ほとんどない。学校現場に
おける中国帰国児童生徒は中国残留孤児
の孫や中国残留婦人の曾孫を中心として
依然増加傾向にあるが、日本生まれの者
や乳幼児期から日本にいる者など、言語
文化的には一般の日本人児童生徒にほ
んど同化している者が多数を占める。今
後あらたに入国してくる中国帰国者がほ
んどいないなか、研究はますます充実
していくのか、それとも(さしたる成果
もなく)このまま収束していくのか。中
国帰国者の年少者の教育に関する研究は
二〇〇五年頃に岐路に差しかったとい
える。

三

中国帰国者の年少者といえは——日本
語が話せなくて困っており、異文化不適
応を起こしており、授業についていくの
が困難で、高校や大学への進学も厳しく、
なかには犯罪に走ってしまう者もいる
が、一見したところ何も問題がないよう
に思われる者でも実は「自分は中国人か

日本人なのか」ということで悩んでいる——そういうふうに相場が決まっている。「ステレオタイプだ」という批判があるかもしれないが、実は中国帰国者の年少者について書かれた論文の数々は、全体として見ればこうしたいいくつかの（限られた）テーマを屋台骨に編成されている。上記のいずれとも無関係な視点から書かれた論文はそう簡単に見つかるものではない。

これは生身の人間を相手にする学問、なかんずく年少者を研究材料とする学問の宿命ともいえる。年少者からデータを頂戴するという研究活動をどうやったら正当化できるのかと考えているうちに、やがて研究者は問題を抱えて困っているかわいそうな子どもたちを自ずと発見するのである。

実際「こんな研究いつたい何の役に立つのか」「学問のための学問じゃないのか」という論文は少ない。中国帰国者の年少者の教育について書かれた論文は、そのどれもがタイトルからして研究者の熱い気持ちや温かい眼差しを感じさせる

ものばかりであり、なかには「何が問題で何が望ましいのか」がストレートに伝わってくるものも少なくない——「『中国帰国者』の私は中国人——ある女子学生の聞き取りから」（福岡・黒坂、二〇〇二）、「中国帰国生徒のアイデンティティを育む教育——大阪府立高校における二つの民族サークルを中心にして」（田淵・森川、二〇〇一）、「定時制で立ち直った中国帰国者の子ども」（津田、一九九七）、「バイリンガル教育の可能性——中国帰国生の高校、大学進学との関連において」（友沢、二〇〇〇）、「高等学校における中国帰国生徒の統合——日本語教育を手がかりにして」（志賀、一九九二）、「中国帰国中学生の異文化適応に関する研究——ストレッサー・有能感・文化受容態度の関連から見た特徴」（山本・本間、二〇〇五）等々。

四

中国帰国者の年少者について専らに研究し継続して研究論文を発表している者は意外に少なく、管見の限りでは福寫智、

広崎純子、池上摩希子、安場淳の四人しかいない（筆者自身は研究歴が長いものの、学術雑誌に発表した論文がないのでここには含まれない）。このうち前者二人は大学院生として中国帰国生がいる学校現場に出入りしたり、主として日本の生活歴が長い者から学校生活を中心としたライフヒストリーを聞き取り、その研究成果を大学の紀要に発表するというところから研究経歴が始まっているが、後者二人は埼玉県所沢市にある中国帰国者定着促進センターの日本語教師として中国から帰国・来日したばかりの大人や子どもへの指導にあたるかたわら、日々の教育実践のなかで発見した教育課題について同センターの紀要に発表するということから研究経歴が始まっている。

五

福寫は短い論考を数多く発表している。インタビュー対象は論考ごとに異なるが基本姿勢はどれも同じ。非常に一貫している。

福寫が注目するのは中国帰国生がアイ

デンティティを形成していく過程である。福寛は「中国人なのか日本人なのか」という二項対立的にキッチリ色分けされたアイデンティティ観——すなわち、灰色でどっちつかずのアイデンティティは有り得ない（もしくは好ましくない）とするアイデンティティ観——を否定する。また、アイデンティティは静的で固定的で単層的なものというよりは動的で流動的で多層的なものであるとも主張している。さらに、アイデンティティとは、日常生活における個別の他者との駆け引きや自己の内面との対話から成る一種の回路を通じて不断に更新されていくものであり、その時々状況に合わせて複数あるアイデンティティのなかから一つだけ他者に対して選択的に呈示することすらあると言う。

ところで、筆者は、他ならぬ中国帰国者三世を事例に上記のことを主張しようとするのは得策でないように思う。もとより中国帰国者二、三世と言えば、血統的にいっても国籍法から判断しても、多言語で多文化な生活環境を見て、日本

人と中国人のちょうど中間に位置している人々（あるいは、どちらに転んでも、それなりに言い訳が立つ人々）である。ゆえに、これらの人々が「日本人か中国人か」に関して二者択一的で固定的なアイデンティティを持ち合わせていないと主張したところで、福寛論文を浅いレベルでしか理解できない人やアイデンティティが血統や国籍や言語文化から直に派生すると信じて疑わない人からは「そんな当たり前のことをいちいち論文に書くな」という言葉が返ってくるに違いない。そういう人たちを説得するためにはむしろ、例えば血統的にいっても国籍的にいっても百パーセントの日本人であり、米国においても日本人としてのアイデンティティを保持してきた「海外子女」の方を事例としてとりあげた方がスッキリするのではないだろうか。彼（女）らが、日本に帰国した後で教師や同級生から米国人あつかいされることを通じて自分の米国人性を思い知らされるとか、時と場合に応じて日本人としての自分と米国人としての自分を器用に使い分けて損失を

抑えたり収益を上げたりしているとか、そういう事例を追いかけた方が、アイデンティティが周囲からの影響を受け易い生ものであることがよく分かるし、ついでに血統や国籍や言語文化に必ずしも拘束されないアイデンティティの恣意性や荒唐無稽さも浮き彫りになって、よいのではないかと思う。また、福寛はライフヒストリー的な手法により生徒のアイデンティティの変遷を描き出すことになりに成功していると思うが、今後はそれ以外にも、学校現場の中に入り込んで国際理解教育の行事が企画・実行されていく現場に立ち会うなどして、個々の生徒どうしのやりとりを間近に観察し、アイデンティティの管理や更新が生じている決定的瞬間を押さえるというエスノメソッドロジック的な手法を併用してもよいのではないかと思う。

六

広崎の論文も福寛と同じくライフヒストリーを中心に組み立てられているが、福寛のように複数の論文を貫く理論上の

基本姿勢があるわけではない。また、これは福島にも（ある程度）当てはまることだが、広崎が紹介する事例には「たまにたま出会った中国帰国生にインタビューをお願いしたら一応こんな話が聞けた」という印象のものが多し。ライフヒストリーの魅力は何といつても個性の記述や多様性の暴露にあると思う。もう少し実際の範囲を広げたりインタビュー対象を増やすなどして、インパクトや意外性のある事例を探した方がよいと思うし、属性や境遇や意見が互いに全く異なる好対照な事例をわざといくつか選び出すなどして中国帰国生のなかにあるバリエーションを強調した方がよいと思う。

七

池上は「『中国帰国生徒』に対する日

本語教育の役割と課題——第二言語教育としての日本語教育の視点から」において、年少者を対象とした第二言語としての日本語の教育の諸問題を非常に平易で無駄のない文体で網羅的にキッチリ整理している。一九九四年一月という（恐ろしく）早い時期に書かれているにもかかわらず、日本語教育という地平においてはもうこれが既に決定版であり、今後誰かがこれを加筆・更新するのはかなり難しいと思われる。池上が設定した枠を無視したり乗り越えたりしようとする者は、もう日本語教育という学問領域を卒業して言語学や心理学や社会学などの学問領域へと旅立つて行く他ない（あるいは研究者であることそれ自体を放棄する他ない）だろう。

池上の論文からは「常識的なことが常識的に整理されているだけで新情報も新鮮味もない」という印象を受ける人もいよう。だがそれは二〇〇六年の今日に生きる我々の感覚である。考えてもみて欲しい。一九九〇年代前半といえれば日本語教室担当なるものが（周縁的な仕事

として）ようやく学校教員の間に分化し始めていた時期である。日本語教師養成講座の修了生が地域の日本語教室に繰り出していくのは一九九〇年代後半であり、日本語教育学専攻の学生が論文を書くために学校現場に入り込んでいくのは二〇〇〇年代前半である。この論文が書かれた当時は、第二言語としての日本語教育に精通した学校教員も年少者を専門に扱う日本語教師もまだほとんどいなかった。池上の論文がそのような時代背景の下で書かれたということ忘れてはならない。

なお、池上がこの論文を書いた一九九四年は、新規入国者における就学生が激減する一方で定住者が激増しようとしていた時期にあたることもついでに指摘しておこう。このような時期に年少者という新たな市場を見いだして「年少者のための日本語教育」という特集を組み、「インドシナ難民児童」「中国帰国生徒」「中南米からの日系就労者子弟」に関する論文を掲載した日本語教育学会の先見性には本当に感心してしまう。

八

安場が書いた「各都道府県による『中国帰国生徒・外国人生徒』の進学保障の現状——公立高校の入試特別措置の設置状況についての調査報告」は、各都道府県が中国帰国生徒やそれ以外のニューカマー生徒のためにどのような高校入試特別制度を整備しているのかを悉皆調査した労作であり、全国の概況を大雑把に俯瞰するのに役立つ。ただし、細部において事実誤認と受け取られかねない記述が認められる他、都道府県ごとに回答態度にばらつきが見られ、しかも、こうした情報が時と共に古くなっていくものである以上、もし論文等に引用したいのであれば、この論文の兄弟姉妹編として中国帰国者定着促進センターのサイトで公開されている、より正確で詳細で新しい高校入試情報をチェックするか、自分で直接各都道府県に問い合わせた方がよい。なお、CITE検査ではヒットしなかったものの、類似のテーマを扱った労作には倉石一郎が書いた「大学における中国帰

国者特別選抜入試制度に関する一考察——全大学対象実施状況調査結果から」がある。

九

上述を以て今回筆者に与えられた任務は全て完了した（とさせて欲しい）。ここから先は、筆者が冒頭で設定した基準からは少し外れるものの、本稿でどうしても紹介しておきたい論文を紙幅が許す限り列記する。

齋藤裕子「地域に根ざした日本語教室をめざして」——齋藤は兵庫県にある地域の日本語教室で活躍するボランティアである。この論文は年少者について書かれたものではないが、生活者としてのニューカマーに対して日本語を教える際の秘訣がぎっしり詰まっている。先に紹介した池上論文と同様、細かい問題にまで気を配って丁寧かつ簡潔に書かれており、完成度が高い。日本語教育を専攻する学生には、理屈をひと通り勉強し終わった後でぜひこういうものもテキストとして読んで欲しい。

小川郁子「外国人児童・生徒の学習権を保障する——制度改革、意識改革、今のままでもできること」——小川は東京都の中学校教諭であり日本語教室の担当である。この論文は中国帰国生徒に限定して書かれたものではないが、教員側から見た生徒の「ありのまま」と学校側の「本音」が「恐れるものは何もない」といった調子で赤裸々に綴られていて、公立中学校の日本語教室やニューカマー生徒が抱える問題の実態がどんな論文よりもよく分かる。「日本語教室担当のグチ」と言ってしまうまでもだが、グチはグチでも非常にレベルの高いグチの集大成である。しかも、論文の最終章に「今のままでもできること」として（問題の抜本的解決には結びつかないものの）ヤル気さえ出せば明日からでも実行可能な具体的提案がこまごまと列記されており、決して「グチって終わり」の論文ではない。これに大幅加筆したものをぜひ単行本にして欲しい（きつと売れるだろう）。

浜井浩一「中国帰国二世対象者の処遇

について——当時浜井は東京保護観察所に勤務していた。保護観察対象は、一九八二年に渡日して小学校四年に編入し、その五年後に事件を起こしたとされる中国残留孤児二世。浜井は配置換えがあるまでの半年間、この少年に計一四回の面談と心理テストを実施。そのときの記録を元にこの論文が書かれた。中国帰国生との面談を元に書かれた論文は数多い。だが、少年が筆者とほぼ同世代であるせいも、あるいは少年の家族や経歴に関する記述がしっかりしていたせいか、筆者はこの論文に登場するこの少年の姿を最も身近にイメージできた。また、簡素で抑制の利いた日誌形式の文体のせいだろうか、筆者は気が付くと当時二七歳だった浜井と一緒に、少年が自殺するのではないかと心配したり、少年の高校合格を喜んだりしていた。少年は「生活行動分析計画票」の「夢」の欄に「中国へ行って見たいです」と書いている。当時は中国語の衛星チャンネルなんか観ることができなかったし、今ほど気易く中国に渡航できたわけではない。中国に

は「古い」「貧しい」「遅れている」というイメージがつきまとい、中国語を学ぶ日本人も非常に珍しかった。当時の日本において中国がいかに遠い異国であったかを思い返してみると（まだまだ未解決の問題が山積しているとはいえ）今日の中国帰国生は本当に幸せだなと思う。なお、現在の浜井は龍谷大学の教授。同大学の教員紹介サイトによれば「常識を疑い、自分で調べること」がモットー。元法務官僚としての経験を活かし、日本の治安悪化神話がいかにつくられたか等の問題について数々の論考を精力的に発表している。

引用文献

福岡安則・黒坂愛衣（二〇〇二）『中国帰国者』の私は中国人——ある女子学生の聞き取りから』『埼玉大学紀要』第三八号、埼玉大学教養学部。
 福嶋智（二〇〇一）「中国帰国生徒の自己認識に関する一考察——生徒のライフストーリーから」『国際教育文化研究』第一号、九州大学大学院人間環境

学研究院国際教育文化研究会。

福嶋智（二〇〇二a）「中国帰国児童生徒教育研究の現状と今後の課題」『飛梅論集——九州大学大学院教育学コース院生論文集』第二号、九州大学。
 福嶋智（二〇〇二b）「中国帰国者三世の学校および地域における自己呈示に関する一考察——『名前』言語を中心に」『九州教育学会研究紀要』第三〇号、九州教育学会。

福嶋智（二〇〇三a）『外国人児童生徒教育におけるアイデンティティに関する一考察——中国帰国児童生徒教育と「在日朝鮮人」教育から』『飛梅論集——九州大学大学院教育学コース院生論文集』第三号、九州大学。

福嶋智（二〇〇三b）「投稿論文 外国人児童生徒在籍校における国際理解教育実践に関する一考察——中国帰国生徒在籍校における聞き取り調査から」『中国帰国者定着促進センター紀要』第一〇号。

福嶋智（二〇〇五）「中国帰国生の中国語観に関する一考察——学校における

言語の位置づけに関連して『国際教育文化研究』第五号、九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会。

浜井浩一（一九八九）「中国帰国二世対象者の処遇について」『更生保護と犯罪予防』第九二号、日本更生保護協会。

浜井浩一（二〇〇四）「日本の治安悪化神話はいかに作られたか——治安悪化の実態と背景要因（モラル・パニックを超えて）」『犯罪社会学研究』第二九号、日本犯罪社会学会。

広崎純子（一九九九）「中国語を母語とする児童生徒に対する言語教育関する考察——母語保持・喪失状況をめぐって」『早稲田教育評論』第一三三号、早稲田大学。

広崎純子（二〇〇五）「学校教育における日本語教育の側面——中国帰国生徒の学校体験をめぐる語りから」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第一八号、早稲田大学。

広崎純子（二〇〇六）「中国帰国者二世・三世の進路選択」『アジア遊学』第八五号、勉誠出版。

池上摩希子（一九九四）「中国帰国生徒」

に対する日本語教育の役割と課題——第二言語教育としての日本語教育の視点から『日本語教育』日本語教育学会。倉石一郎（二〇〇四）「大学における中国帰国者特別選抜入試制度に関する一

考察——全大学対象実施状況調査結果から」蘭信三編『中国帰国生徒特別枠入試の意義と課題——緊急シンポジウムの記録』（科学研究費成果報告書）。小川郁子（二〇〇三）「外国人児童・生徒の学習権を保障する——制度改革、意識改革、今のままでもできること」『中国帰国者定着促進センター紀要』第一〇号。

齋藤裕子（一九九九）「地域に根ざした日本語教室をめざして」『中国帰国者定着促進センター紀要』第七号。

志賀幹郎（一九九二）「高等学校における中国帰国生徒の統合——日本語教育を手がかりにして」『東京大学教育学部紀要』東京大学教育学部。

田淵五十生・森川与志夫（二〇〇二）「中国帰国生徒のアイデンティティを育む

教育——大阪府立高校における二つの民族サークルを中心にして」『教育実践総合センター研究紀要』第一〇号、奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター。

友沢昭江（二〇〇〇）「バイリンガル教育の可能性——中国帰国生の高校、大学進学との関連において」『国際文化論集』第二二号、桃山学院大学。

津田玄児（一九九七）「定時制で立ち直った中国帰国者の子ども」『高校のひろば』旬報社。

山本彰子・本間友巳（二〇〇五）「中国帰国中学生の異文化適応に関する研究——ストレッサー・有能感・文化受容態度の関連から見た特徴」『教育実践研究紀要』第五号、京都教育大学附属教育実践総合センター。

安場淳（二〇〇三）「各都道府県による『中国帰国生徒・外国人生徒』の進学保障の現状——公立高校の入試特別措置の設置状況についての調査報告」『中国帰国者定着促進センター紀要』第一〇号。